

---

# へんなカッパのモノガタリ

雪代

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

へんなカップパのモノガタリ

### 【Nコード】

N6676U

### 【作者名】

雪代

### 【あらすじ】

うん？おれ？名前か、忘れた。なんか死んだ記憶はあるんだが。まあ今生きてるからいいじゃん。気づいたら山にいたんだよ。んで、気づいたら河童になってた。すーすーってね。どうもここ東方の世界らしいよ？死亡フラグ満載過ぎて、カップなんて非戦闘的な妖怪は遠慮したいね。ま、とにかくにも、せっかくのセカンドライフ、原作までは生き残ってみましょうか。

とくに重たい話にも、シリアスな展開にもならないと思います。

かるゝいノリで、かるゝく読んでいただけるとありがたいです。

いちわ ここはどこ？おれはだれ？（前書き）

オリ主人公、オリキャラ、オリ設定、キャラ崩壊などが嫌な人はご遠慮ください。

いちわ じじはどいっ？おれはだれ？

目が覚めると、知らない場所だった。

「……………っ!？」

声を出そうとして、何故か声が出ない。

まるで自分の体ではないような感覚に、知らず知らずのうちに戸惑う。

手、足、腕、肩、首と順々に慣らして行き、そして倒れていた体を起す。

……………？

全く覚えの無い景色。多分来たことも無い。  
おそろくどこかの山の中。

「……………っ、……………あ、……………あ、あ、あ……………」

声を出そうと苦心。そうしてようやくまともに声が出る。

「ふう、ようやく声出せた。ってか、ここどこ？」

周りを見渡せどあるのは山ばかり。まいったな、と頭を掻き……  
そして自身の腕の小ささに気づく。

「は！？なんでこんなにちっさいんだよ！？」

慌てて他の箇所も見るが、やはり小さい。

小学生より少し大きいぐらいの身長、145前後くらいだろうか？  
明らかに自分のサイズではない……………自分の？

そして、最も大事なことに気づく。

「あれ？……………俺、誰だっけ？」

それから丸一時間かけて思い出し、分かったことは二つ。

俺は一度死んだということ。死んだ瞬間の記憶も、生前の記憶も無いが、死んだという事実だけはどうしても覚えていてる。それは確かだ。

「まあ、引き摺るつもりはないけどな」

生前の記憶にもさして興味は無い。一度は死んだのだ。そして今どうしてかこうして生きている。だったら、俺はもう前の『俺』とは別の人間だ。

もっと動揺するのかと思ったが、割り切ってしまえば何と言ったとはなかった。

そして、もう一つ。これ結構重要なことなんだが。

どうやら俺は、別の世界に転生という小説みたいな事態に陥っているらしい。

それに気づいたのは、さっきうんうんと唸っていた時のこと。ふと、頭の中に浮かんでくる言葉があった。

《あらゆるものを想像し創作する程度の能力》。

東方かよ！？とつい叫んでしまった俺は悪くないと思う。

しかも、ここは普通テンプレ通り、あらゆるものを創造する程度の能力とかじゃねーの！？なんだよ、想像し創作する程度の能力って。創作って、自分で材料集めて作らにやなんのかよ！？

とまあ、そんな経緯を得て、以上二つのことが分かった。

んでまあ、問題はだ。

「これから、どうするかねえ」

ということだった。

「とか考えてた時期が俺にもありました、はい」

「何を言ってるのでしょうか？キミは」

「いや、何でもないよ」

どうも、名も無き転生者改め、河野權です。名前？ああ、自分で適当につけたよ。

いや、誰に話しかけてるのか、俺自身分かってないけど。

あれから二百年くらい経ちました。

は？時間が跳んでる？まあ、キンクリしたと思えば納得できるって。は？出来ない？

うんまあ、とりあえず山を散策↓変な集落発見↓実は河童の住処↓仲間として迎え入れられる。

ということがあったんだ。で、何となく分かったかもしれないけど、俺転生して河童になったみたいだわ。

原作だと河城にとりとかがいる種族だな。正直戦闘向きじゃねー。

まあ、原作介入だなんだとやる気なぞないがな。だって、所詮河

童だぞ？原作介入なんてしてたら普通に原作開始までに死ぬわ。

だからまあ俺の今後の目標は平和に生きる。

けど、この死亡フラグ満載の世界でそれを為すためにはやっぱり強くなきゃ無理だよな。

だから頑張つて強くなろうと体を鍛えたり、妖術（河童だからか水適性）の訓練をしたりした結果、それなりに強くなったりしたんだ。幸い、俺の妖力つてのは、他の河童十匹分くらいはあるらしい。

ちよつと関係ない話だけど、原作のにとりとか天狗とか見ると、天狗とか河童つて排他的な種族なのかと思つてたんだが、俺よく迎え入れられたな？妖力の件も含めて、結構ご都合主義来てないか？まあ、どうせご都合主義なら、鬼とか龍とかもつと強そうなのに転生させて欲しかったがな。いや、鬼は鬼で喧嘩フラグ満載だから無理か？

と、話がそれたけど、最初の十年くらいはそうやって特訓してたんだ。けど、河童という種族はどうにも戦闘向きじゃないみたいで、すぐに限界が来たんだよな。さらに言うと、妖怪だし、肉体を鍛えたところであんまり意味は無かつたんじゃないのか？と気づいた時の俺は。

……………燃えたよ……………燃えた、燃え尽きた……………真っ白にな……………

つと、どこかでゴングの音が聞こえてきそうな状態で、一年くらい過ごしたもんだわ。

でまあ、それで思い出したんだが、河童の種族的特徴つてやつ？

原作での河童の立ち居地って、妖怪の山の技術者集団みたいな感じだったはず。

現に、俺の周辺の河童も時々、何か変なもの作ってる。

そして俺の能力を思い出して、これだと思ったね。

んで、ここで俺の能力説明。使ってるうちに色々分かったんだが、意外とチートな能力だった。

東方の能力ってのは、名前通りの効力じゃなかったり、使い方が決まっていたりと、額面通りなのが意外と少ない。俺が読んでたらしき、二次創作では、けっこう単純な能力ばかりだったのにな。ああ、記憶は無いけど、知識はあるらしい、何故かな。だから東方とか普通に知ってる。

んで、話を戻すと、俺の能力も色々と使い道があることが分かった。主な使用方法は三つ。

まず一つ目は、自身がどんな道具を作りたいか、想い描く、つまり《想像》する。そうすると、必要な材料やその作成手順などが頭に浮かんでくる、というもの。これは便利、なんせ文字通り何でも作り方が出てくるんだから。まあ、材料の関係で作れるかどうかは別の問題だが。後、浮かんではくるが、理論がまるで分からないので、応用が全く利かないという欠点もある。俺は《読み込みダウンロード》の能力と呼んでる。何か設計図を読み込んでみたいだから、そう呼んでる。

二つ目は、一度見て、誰かに使われた道具がどういう経緯でその

効力を発揮するのか、一度で理解する、というもの。ただし、必ず使われた瞬間を見なければいけない。これもまた便利。上で作った道具がどういう理論で動いているのか理解できなくても、これを使えば、一発で理解できる。簡単に言えば《解析》する能力だな。

三つ目は、足りない材料を妖力で代用できる、代用するのに必要な妖力は、その代用する道具の希少性や重要度などで決まり、俺本人にも何となくでどれくらい必要か分かる。これが一番反則くらいと思う。ただ、稀少なものになればなるほどバカみたいに妖力を食うので、多様は出来ない上に、俺の妖力の総量より大きいものは代用できない。

ちなみに、三つ目の使い方は、足りない材料を足りないままに作り出した未完成品に妖力を込めると、一瞬光って、後は勝手に代用されてる。なんという便利さだろうか。

さらにちなみに、材料全部を妖力で代用した創った品は出来るといえば出来る。まず、作る物を想像する、そうすると《読み込み》が発動するから、それと同時に妖力を一箇所に集めると、いつの間にか出来ている。

ただ、十秒もしないうちに消滅するけどな。逆に何か一つでも、ちゃんとした材料があれば、永続的に代用可能なので、そこがキーポイントなんだと、俺は見てる。

でまあ、能力の詳細もそうやって道具を作成しながら、ちよつとずつだけど、知っていつて、いつの間にやら二百年も経ってたよ。妖怪になったせいか、時間感覚がどうも鈍い。丸三日自分の工房に籠ってることもある。

ちなみに、この能力で一番最初に作ったのが、この工房。あると

すごい便利。作業効率が1・7倍くらいになる。

「大丈夫ですか？頭とか」

「どういう意味だよ、オイ」

で、さっきから人の良い笑顔で、人をバカにしたようなことを言っているのが、この集落で最初に出来た友人の池上。本当は河城とか言っらしい。にとりの関係者とか言わないよな……？

池上というのは、俺が個人的に呼んでる、仇名みたいなものだ。

なんで池上？と思っただか？話してれば分かるよ。

「それで、池上はどうしたんだ？」

「はあ、それがまた何か拾いに行こうかと思ひまして」

「それこの間、酷い目にあつたばかりじゃねえかよ」

「今回は大丈夫です、ちゃんと護衛をつけますから」

「護衛？誰のことだ？」

「良い質問ですね」

初めてこの言葉を言った時、こいつの仇名は池上に決定されたのだよ。ふふ。

「何でも、天狗の友人が一人、今日は暇らしいのですよ。だから、その方に頼もうかと思ひまして」

「ふーん、それで？」

「キミも一緒にどうですか？櫂」

うーん、材料ねえ。そう言えば、あれとかちょっと少なく……そ

う言えばあれも……。

「うし、了解。俺も行くわ」

「そうですか」

そう言っ二人で歩く。色々拾いに行くからな、荷物が要だ。

まさか、この出来事がきっかけで、あんなことになるうとは、俺も池上も、作者すらも思いつかなかっただろうな。

ちよっとしたおまけ話

というわけで、ちよっと補足説明だ。

まず俺のいる場所は、河童の集落だ。同じ山には天狗もいるが、数はそんなに多くない。鬼はいないが、正直ここが将来の妖怪の山なのかどうか非常に怪しい。

で、俺のいる時代。原作キャラに一人として出会わない上に、河童も天狗も閉鎖的な種族だから情報がこれっぽっちも入ってこない。さらには、人里離れた山の中なので、通りすがりに聞くことも出来ない。お陰で、諏訪大戦があつたのかまだなのかも分からん。

というわけで、今日はこれくらいだ。

以上、河野櫂からの説明だ。



いちわ ここはどこ？おれはだれ？（後書き）

昨日の晩思いついて、話も書いてしまい、思わず投稿してしまった。  
適当に思いついたら書いて、適当に投稿します。  
定期更新をあてにしているわけではない作品です。

にわめ    おおゆうしやよ、しんでしまつとはなさけない    (前書き)

出来たあああああ!!!

なんか、書いてるうちに段々とギャグになってきた。

天狗の設定とか、河童の設定とかけっこうオリジナル要素多いです。

にわめ おおゆづしやよ、しんでしまつとはなさけない

拾いに行くと一概に言ってみても、どこになにを？という疑問が沸いてくる。

簡単に言つと、廃墟（つばいところ）に鉄とかその他色々を広いに行くんだよ。

山を降りて、少し歩いた所に、廃墟つばいところがある。

なぜぱいと言うのかと言えば、どうにも時々使われたような形跡があるから。

廃墟というのは長い間使われていない建物のことだ。だから廃墟とは言え無いけど、見た目はすごく廃れている。だから廃墟（つばいところ）なんだよ。

ちなみに、原作には出てきたことのないような種族の妖怪たちの住処になってたりする。

種族は知らん。だって俺別に妖怪に詳しいわけでもないし。

河童てのは、妖怪の中では非好戦的な種族だ。原作でも人間の盟友とか言ってたし。

現代だと相撲が好きとかいう話があるせいか、割合腕っ節は強いのだが、それだって鬼のように怪力であるわけでもない。

んで、そんなやつらが妖怪の巢（坩堝とも言つ）に入ったら、まあ玩具みたいに遊ばれて殺されるのがオチだ。

けれどそんな場所にも関わらず、俺たちは何度もそこに足を運ぶ。何故か？

山に籠ってるばかりじゃあ絶対に手に入らないものが手に入るからだよ。

代表的なもので言えば鉄。今がいつの時代なのか知らないけれど、鉄や銅などはその辺には落ちていない。欲しかったら鉱山などで自分で見つけてくるしかないのだ。けれど、基本山に引き籠もってばかりの河童にはそんなことは無理。ついでに言つと、縄張り意識の強い天狗が河童を遠くには出してくれないだろう。そりゃもう山に戻る気が無いならともかく、鉱山一つ見つけるのに、住処を捨てる気にもなれず、けれど木や土ばかりでも面白くない。さて、どうしたもののか？と思つていた俺の前に突如現れた<sup>たからのやま</sup>廃墟。

そんなに遠くないので、天狗も何か言つつもりも無いらしく、俺にとっては渡りに船と言つたところか。

「ところでよ、池上。そつちの天狗の兄ちゃんの紹介は無いのか？」

「おつと、これは失礼しましたね。こちらは私の友人の天狗の……」

<sup>かさぎり</sup>  
「風切だ。よろしく、新入り」

「おいおい、兄ちゃん。新入りつて、俺が山に来たのもう二百年くらい前だぞ？」

「けど一番最近入ってきたやつだろ？ だったら間違つてもないだろうよ」

くく、と笑う風切。何かあれだな、やんちゃなアニキ分みたいなやつだな。八重歯が立っているのはチャームポイントのつもりか、ゴルア。

そうそう、前話一（メタ禁止）で護衛という単語を使つたし、それらしき伏線（メタ以下略）を匂わせたから、予測してた読者一（メ以下略）もいるかもしれないけど、この間、って言っても半年以上前のことだが、池上が一人で廃墟に行ったらいいんだ。

そして、そこでけっこうな怪我をして帰ってきて、一時集落がざわめいていたことがあつたんだよ。

んで、前回はやたらすばしっこいネズミみたいなやつにやられてそれに氣をとられてるうちに他のやつらまで来たらしい。俺の渡しておいた保険が無かつたらどうなつてたことやら。

というわけで、今回はこの天狗が俺たちの護衛、正確には池上の護衛つてわけだな。

俺？別に俺自身はそんなに強くないぞ。ただ、色々と秘策ていつておきがあるだけでな。

とまあ、凄い危険地帯のように書いた（以下略）が、今は日が出ている時間帯だからな、そんなに危険は無いんだよ。妖怪だからか、どいつもこいつも、夜行性だ。

「おい池上、なんかいいのあつたか？」

俺の問いに、返答はノー。

基本的な素材、鉄や銅、亜鉛にニッケルと言った現代人の知識ならばこそその素材はすでに結構な量が拾えた。十年近く通ってるが、いつこうに廃材が減った気配が無いんだが、気のせいだよな？

今俺が言いたいいの、とは物珍しいものを指す。

「そろそろ夕方になるが、帰らないとまずくねーか？」

「いえ、もう少し、夜までには帰るので、もう少しだけ探しましよ  
う」

と、粘る池上に、俺はどうするかと思考してみる。

帰らないと、まずいのは確かだ。夕方は黄昏時、逢魔時―（厳密にはこの二つの時間帯は違うんだがな）と言って、妖怪などが動き始める時間だからな。

けれど、もう少し粘りたい気持ちも分かる。ここは気軽に毎日行けるような場所でもないからな。

天狗は排他的で集団意識が強く、だからか上下関係や規律に厳しい。けれども、その分友人と認められると、とても仲良くなれる。山の天狗は集落の河童をやや見下した傾向にあるが、けれどもその分、河童たちの安全を守ろうとしてもしてくれている。だからこそ、河童も天狗の言うことには割合素直に従うし、頼るのだ。

そんな天狗が、いくら黙認とは言え、こんな危険地帯に河童が少数で行くようなこと、いい顔をするはずが無い。かと言って、厳しく締めすぎても、かえって反発がでることくらいは天狗にも理解できている。

だからこそその黙認なのだ。特に池上は天狗の友人が少なくない。こう見えて割りとすごい発明をするやつだからな。集落の中でも立ち居地は上のほう。一番の上の大天狗にすら認められている節がある。

自身が認めた友人がわざわざ危険なところに行っているのを見過ごせない。けれど、規律に反していない以上、止める権限も無い。まあ、ジレンマだわな。そんなわけで、こうしてたまたま暇だった、とか理由をつけて、池上の友人の天狗が護衛に来るのだ。

俺は多分護衛対象に入っていないだろうがな。いや、はぶられているとかそういう問題じゃなくて……いや、いいか。そのうち分かるだろ。画面の向こうの皆様にも（下略）。

ま、俺も池上もそれに気づいている（池上は何となくだろうけど）からこそ、あまり気軽に行けないのだ。特に、前回、池上は怪我をしたしな。

あまり気軽には来れないのに、今までと同じ量を確保しようと思ったら、今度は一度に大量に持って帰らないと行けなくなった。そして、時々見つかる珍しいものを探し、ついつい長居してしまう。

これがマイナススパイラルというやつか。

けどまあ、今回はこの辺にしておくか。あまり長居してしまうのも良くないし。一応何かあった時の準備だけはしているけど。

「今回はこのくらいにして帰ろうぜ？」

「うーん、權がそういうなら、そうしておきましょう」

池上は物分りが良くて助かる。後博識だな。眼鏡があれば完璧な天才君ぽいものにな。いや、気にしないでくれ。こっちの話だ。

ここで一つ補足説明。廃墟、と言ったが、正確には廃棄都市……のようなもの、と言ったほうが正しい。多分、読者が想像している（略）のより規模が遥かに大きい。

んで、帰ろうとしたんだが。

「はあ、ちよつと遅かったな」

「困りましたね」

荷物をまとめ、いざ帰ろうとすると、すでに近くに妖怪がいた。

蜘蛛？みたいな妖怪だ。しかもかなりでかい。全長が二、三メートルくらいありそう。

しかも近くの廃墟から全長五メートルくらいある巨大なゴリラみたいなのも出てきた。

「うわあ、面倒くせ〜」

逃げれるか？転生前の俺の体がどのくらいのサイズかは知らないが、今の俺の体は小学生サイズだぞ？

結論、無理。

仕方ねえな、アレ使つか。

と思ったら。

「ここは任せろー!」

やせいのかざぎりがとびだしてきた!

たたかう    どうぐ  
にんぎょう    にげる

↓たたかう

「つて、なんで俺と戦ってんだよ!!?」

「こら、風切。地の文を読むんじゃねえよ」

全く、メタな発言は控えて欲しいもんだわ。

「お前が言っなあああ!!!!!!」

何故か叫んでいる風切を無視して、池上に目配せ。  
こくり、と頷いたのを確認すると。

「じゃあ、俺と池上は逃げるぞ?」

「ああ、ここは俺に任せて、お前たちは先に逃げる」

なんてベッタベタな死亡フラグ。

「このままじゃマズい!!!お前何か生存フラグは立ててないのか!

「？」

「意味分らんこと言っでないで、早く逃げろ！！」

と言って、ゴリラみたいな妖怪に向かって走りだす風切。

「待て、風切」

「俺は絶対に死なんさ！！帰って、女房ともう一度会うまでは絶対に死なんぞおお！！！！」

「それは死亡フラグだあああああ！！！！」

そして、風切が振り上げた右腕を、真っ直ぐに突き出し。

ペチン

ゴリラに軽くはたかれて、地面に落ちた……………っは？

「か、風切…………？」

「……………」

へんじがない、ただのしかばねのようだ。

そして俺は。

「おおゆうしゃよ、しんでしまうとはなさけない」

現実逃避にそんなことを言った。

にわめ    おおゆうしゃよ、しんでしまつとはなさけない    (後書き)

風切のアニキキャラがおいしすぎる。

また出したくなるなあ。死亡フラグたてまくりww

そして、ビンタ一発で倒されるとか弱すぎだろww

こういうやつに限って、長生きするんだよな。

次回は、權が主人公らしくやってくれる……と期待したいです。

さんわ おれがばかだった（前書き）

久々の投稿。今回は、權印の道具が出始めます。

さんわ おれがばかだった

さて、現状説明をすると。

俺と池上は妖怪と対面。護衛の天狗、風切のアニキは弱すぎるので、弾避けにもならない。

そろそろ夜になる。つまり、他の妖怪たちも動き出す。

結論、可及的速やかにここを脱しなければ、マズイ。

っち、護衛弱すぎだろ。なんで、ただ掃われただけでノックアウトしてるんだよ。

仕方ねえ、ここが使いどころだな。

「池上、俺が合図したら、目を閉じて、手で覆っとけ」

傍にいる池上に、そう言つと、懷から丸い玉と黒眼鏡を取り出し、眼鏡を掛ける。

感じる妖力は、目の前の二匹のみ。周囲にはまだ他にはいない。こいつらを撒いて、即座に脱出。それが理想だ。

「うし。行くぞ」

覚悟を決め、池上が手で目を隠したのを確認し、玉を投げる。

瞬間。

「~~~~~っ！！！」

強烈な閃光が玉から発せられ、目の前の妖怪二匹がその強烈な光に目を焼かれ、悶える。

ゴリラみたいなのはともかく、蜘蛛っぽいやつに効くか不安だったが、どうやら成功みたいだな。

すぐさま俺は、倒れている風切のところに走り、その首根っこを掴んで逆走する。

「逃げるぞ、池上！！」

俺の言葉に反応して、池上が目を開き、こちらに一緒に走り出す。

さっきのは、文字通り《閃光玉》という。俺が作った発明品の一つ。強烈な光で目を焼く玉だ。ただし、黒眼鏡と併用して使わないと、自分の目まで焼かれるから注意しなければならない。

さらに言うと、あれだけ派手なことをすると、他の妖怪の注意を引いてしまうので、ある意味諸刃の剣とも言える。

ちなみにこれ、とある有名な狩猟ゲームの道具を思い出して作った。ゲームの道具などという効果や使用している図の想像がしやすいものは比較的簡単に設計図が出てくる。けれど、ゲームと違って現実には便利な光る蟲はいないので、マグネシウムなどという貴重な

ものを使っている。なので、二百年溜めてきて後二十も無い貴重な道具だったりする。

「はあ、はあ。今回ちょっと拾い過ぎましたかね？やたら袋が思いですよ」

「毎回そんなこと言ってるよな。それで次こそはもうちょっと自重しようと言って、結局毎回同じことしてるよな」

廃都市内部を走る。今回は思っていたより奥まで行っていたようで、まだ外部に辿り着かない。

まずいな、そろそろ他の妖怪がこちらに気づいて動き出すぞ。ただでさえあんな目立つ光出したんだ。すぐに気づかれて、住処を荒らした俺たちを追ってくるに違いない。

「池上、今の内にこれに水入れておいてくれ」

そう言つて、俺はまた懐から瓢箪を取り出す。

懐の中には《ドラポケ》という俺の作った道具が入っている。モデルは四次元ポケット。空間を圧縮した袋で、本物ほどではないが、中は非常に広い。確か東京ドーム一個分くらいの要領はある。まあ、口の問題で大きなものは入らないが。中に入れた方がいいが、出てこないという問題が発生したので、必要なものが取り出せるように改良はしてある。

それで、池上に渡したのは《蛟瓢箪》という。三十センチにも満たない大きさの瓢箪の内部に、一トン近くの水を溜めることが出来る不思議な瓢箪だ。

で、なんでそれを池上に渡したかと言えば、池上の能力が《水を

生み出す程度の能力』だから。

便利と言えば便利だが、どうにも戦闘向きではない河童らしい能力だな。

水を溜めるのに、一旦二人で立ち止まる。近くに死角の多そうな廃墟があつたので、そこに隠れる。

「大丈夫か池上？体力切らしてないだろうな？」

「ふう、大丈夫です。まだ走れます」

結構な量の資材持つてゐるからな。普通に人間ならもうとつくに倒れてゐるだろうな。持って歩くことすら出来ないかもしれないが。

「よし、じゃあ蛟瓢箪に水入れておいてくれ。目一杯だな」

「分かりました」

そして、ここまで連れてきた風切をたたき起こすことにする。

「さつさと起きろ。このダメ天狗」

「っは！？ここはどこだ！！」

「うつせえ、大きな声出すな、バレるだろ」

さて、この護衛のくせに真っ先に飛び出して一撃でのされたダメ天狗、どうしてくれようか。

「くう、この風切、一生の不覚だぜ」

「もう死んでくれんかな、この天狗」

無駄に暑苦しいだけだし、邪魔だし、荷物だし、暑苦しいし、鬱陶しいし。

「おい、風切」

「おう、なんだ？」

「お前は空から後どれくらいで脱出できるか見てきてくれ」  
「任せとけ」

元気だけは無駄にいいな、この天狗。

「櫂、終わりましたよ」

「おう、助かったぜ、池上」

蛟瓢箪の封をし、再び懷に仕舞う。

「風切はどこに？」

「空から後どれくらいで出れるか見てもらいに」  
「そうですか」

はつきり言おう。  
「俺がバカだった……………」

まさか、まさか。

「現状認識もせずに、隠れている俺たちを大声で呼びやがるなんて……………」

おーい、お前らー！！！！と言う声が聞こえた時の俺の顔の引き攣り具合と言え、隣で池上が心配そうに見ているほどだったからな。

「おかげで妖怪呼び込んでんじゃねーかよ!!!」

増えてるぞ、当初二匹だった妖怪が十匹越えてるじゃねーか!!!  
あいつ護衛じゃねーだろ!!! 実は暗殺者と言われたほうがしっくり来る。

「しかもあのバカ天狗、一人だけ空飛びやがって!!!」

一人だけ空を悠々と飛んで逃げてやがる。俺たちも飛べるのは飛べるが、この重量の荷物のせいで、低空飛行にしかならんからな。それじゃただの獲物だ。

「何かないか、何かないか!!!?」

懐の袋をがさごと探る。何かこの状況で使えるもの、使えるものの。

「これだ!!! 池上、速度上げろ!!!」

二人して、疾走する速度を上げ、全力で走る。

「爆ぜろー!!!」

バツと、背後に向かって手のひら一杯の石ころを投げつける。  
そして、石ころが転がった途端。

ドンドンドンドン、ドンドンドン

石ころが爆発したず。

《爆弾岩》。とある有名なRPGに出てくるまものの名前。文字

通り爆発する危険な岩。

シンプルで作りやすいので、大量に持つてる。  
というわけで、出血大サービスとばかりに投げ捲くる。

爆発で妖怪を足止めし、全速力で走ったのも合わさって、一気に引き離す。

「ていうか、まだ外に出ないのかよ！！おい、風切、まだか！？」

「もーちよつとだ」

正直、このダメ天狗の言うことを信じて良いのか分からなかったが、信じるしかないので、とにかく走った。

さんわ おれがばかだった（後書き）

次回に続く。

トゥービーコンティニュードウ。

眠いので今回はここまでで。

いつか、權印の発明リストを書きます。

現在二十四種類までは考え付いています。

よんわ おろかなのはおまえだ (前書き)

かーぱかつぱかつぱ、かつぱ、かつぱ、  
ふと仕事中に一次創作の設定が思いついた。  
結構面白そうなので、煮詰めてその内投稿しようかと。  
よければその内見てくださいね。

よんわ おろかなのはおまえだ

ふと見えた都市と外とを隔てる壁に、思わず安堵する。

「おし、見えた。風切の言うことだから正直信用してなかったが、とりあえず助かった」

信用とは行動の積み重ねとはよく言ったものだ、と独りごちる。

正直、予想以上に爆弾岩が減った。人間なら手で握るだけで、指が全て吹っ飛ぶ程度の威力はあるはずなんだが。

「やっぱ、妖怪相手だと威力に欠けるな、この辺はまだ改良の余地ありか」

人間で言うなら、爆竹が弾けた程度の効力しか無いようだからな。ここまで大量に使ったことは無かったから、良いデータが取れたという意味では悪くも無かったんだが。

「それでもやっぱり、まだ都市外に出てないのに、ここまで目撃りしたのはきついな」

後ろを振り返り、そう呟く。

爆弾岩は爆発時に煙を発するので、大量の爆弾岩が転がった背後はもう煙でほとんど見えない。

おかげで、追っ手は撒いたのでよしとするべきか。

「風切、先に行って都市外に敵がいらないか、見てきてくれ。ただし、見つけても大声で叫ぶなよ？」

念を押しておかないと、こいつはまた同じ失敗を繰り返す。それだけは避けねば。

「おう、俺に任せな！」

元気良く返事をし、翼をはためかせ、風切が壁を越えようと、高度を上げる。

それを見ながら俺は、ドラポケの中を整理する。次に何かあった時のために、使えそうなやつを探さないといけないからな。

「池上、大丈夫か？」

「ふう、ええ。少し休みましたから、大丈夫です」

「頑張れ。この壁を越えたらもう後はひたすら飛ぶだけだ」

「はい、分かってます、大丈夫ですよ」

そうか、と呟き袋の中から銃を取り出す。

名を《水切銃》と言い、さきほど池上に渡した蛟瓢箪と組み合わせる使う。

簡単に言えば、超凶悪な水鉄砲だ。水圧を高めた水流が鉄すら貫くウォーターカッターの原理を利用して作った。

最大の長所は、その凶悪な威力とは裏腹に外見的には、小さいこと。蛟瓢箪がやや大きいだけで、片手で持てる程度の大きさだ。しかも、蛟瓢箪の内部は空間を弄ってあるので重さはそれほど感じない。人間でも片手で振り回せる程度の重さしかない。

けれど、たかが水と侮れば、体に穴が空く程度に凶悪な威力を持つ。何せ妖怪の肉体ですら決めるほど凶悪な水圧を発生させるように作ってあるからな。

「とりあえず、何かあればこれでいけばいいな」

「……………とりあえず、一つだけ言っておく」

震える手を抑えつけ、目の前のバ力を見据えて。

「愚か者はてめーだ、このバ力天狗————！！！！！！」  
ドロップキックをかました。

時間をほんの少し戻す。

「あ……………あ……………」

隣にいる池上も顔が引き攣っていた。

「ふはははははは~~~~!!!!この風切様に挑戦する雑魚はいねーか!!!?」

馬鹿だろ、いや馬鹿か。

「とりあえず、池上、あの馬鹿が目立ってるうちに、壁沿いに行つてろ。いつもの場所から抜けれる」

「あのアホ回収しないとダメだろ」

今更だが、この廢都市の全体構造を言つと、円形に廢墟が並び、その周りをぐるつと十メートル弱ほどの高さの壁が囲んでいる。壁と言つても、城壁のような幅の広いやつを想像してくれ。

けれど、都市と同じように、壁も劣化しており、ところどころ罅割れてたり、崩れてしまっていたりするところもある。

あの馬鹿が目立っているから、こつそり行けばバレないだろ。一端外に出てしまえば、後はひたすら山まで飛ぶだけだ。今は飛べないがな。ただでさえ空を飛ぶのは目立つのに、こんな重い荷物持ったまま飛んでも速度が出ない。のろのろ敵の目の前で飛んでるなんてただの獲物でしかないからな。

というか、原作のやつらは気軽に飛んでるが、飛ぶのだってそれなりに難しいんだぞ？俺だって十年以上かかってようやく浮く状態になり、三十年かけて飛べるようになったんだから。

まあ、あれだがな、妖力は十分すぎるほどあるが、地に足つけた人間として生きてきた分、飛ぶイメージが掴みにくかった。今は飛べるし問題ない。

宙を浮く時はいつも妙な感覚に陥る。

もう二百年以上河童してるが、まだ人間だった頃の感覚が消えてないってことなんだろうな。まあ、人間だった時どんなやつだったのか、全然覚えてないんだがな。

壁の上に降り立つと、馬鹿がこちらに気づく。

「おう、見てくれ。これだけ叫んでも誰も来やがらねえ。ハハハ、愚か者どもめ、逃げられると思うなよ」

コイツは一体何を言っているのだろう？  
というか。

「……………とりあえず、一つだけ言っておく」

震える手を抑えつけ、目の前のバ力を見据えて。

「愚か者はてめーだ、このバ力天狗……………!!!!!!」  
ドロップキックをかました。

「いてーな、何しやがる!？」

「アホかテメー!!!!なんでわざわざ妖怪を呼び込もうとするんだよ!!!疫病神か!!!」

たく、仕方ねーな。

「見せて欲しいんだろ？」

「は？」

突然、何を言っているのか、分から無いと言った表情の風切を無視し、水切銃を仕舞う。

「何となくそうじゃないかと思ってたが、お前、上から何か言われきただろ」

ピクリ、とその表情が動く。

「前々から思ってたけど、俺の存在は天狗にはどうも邪魔らしいな」  
それは、きつと俺が……………」

「だからいつかこうなるとは思ってたさ」

口の端が吊りあがる。もうそう長くはいられないんだ、だったらやってやるさ。

「天狗ってのは、その力で山を守っている。だから危惧したんだろ？ たかが河童の俺が、天狗を脅かすほどの力を持っているんじゃないかって」

「……………何だよ、気づいてたのか」

「いくらなんでもあからさま過ぎだ。わざと俺たちの危機感を煽るような真似をして、俺の力を見てたんだろ？」

「そのとおり。でもまあ、大天狗様の言ってたことも分かるわな」  
お前、ちよつと危険だわ。

「知るかよ。お前らのことなんて」

妖怪なんだ、超個人主義で何が悪い？  
服を引っ張り少しだけ胸をさらけ出す。そこに手をいれ、首にかかっているペンダント型のソレを取り出す。

「見てみるよ。河童である俺の目でもはっきりと見える。あそこにあそこ、妖怪がいるな、それにあっちも、あっちもあっちもあっちも、妖怪だらけだ」

だからこそ、これは良いデモンストレーションになる。

「ほら、目玉見開いてよく見てろよ、風切。俺の最高傑作だ」  
と言っても、まだ改良中だな。

手にとってペンダントを前に突き出し。

「龍神玉」

そう呟いた。



よんわ おろかなのはおまえだ (後書き)

河野權発明リストナンバー01《龍神玉》。

元ネタは東方人形劇。その効力については次話で。

ただ言っと、間違いなく權の発明リストの中で最高傑作で、切り札です。

ただし、攻撃的なものではありません。

まあ、知ってる人なら何となく分かるかもしれないですけどねえ。

## こわ じゃーな（前書き）

やっと序章が終った。次からは原作キャラが出出すかな？  
作中に出てくる、河童や天狗は作者のイメージと妄想です。注意  
ください。

「わ　じゃーな

河童ってのは、基本的に妖怪の中では有名どころだ。だからこそ、力の強い河童もいる。それこそ、大天狗に匹敵するような。けれど、大多数の河童は気性が弱く、妖怪に襲われるとほとんどの確率で殺されてしまう。

だからこそ、天狗に守ってもらいながら、山で集落を築いて生きている。天狗は天狗で、河童の技術を手に入れることが出来るので、互いに得のある話だ。

だからこそ、俺は異端だ。河童の枠に収まらないほどの妖力と、河童という種族に沿った強力な能力。そして、そこから生み出される数々の道具。正直、今山の天狗全部に襲われても、逃げ切る程度余裕で出来る。倒せないのか？と思ったか？けどな、素早さが自慢の天狗だぞ？それから逃げ切れるということは、ほとんどの妖怪からも逃げ切ることが出来るってことだ。その力が天狗には実に脅威だったらしい。力を示すことで河童を下に置く天狗にとって、自身より大きな力を持つ可能性のある存在は立派に邪魔だったらしい。

けれど、実際のどのくらいの脅威なのか分からない。だから、俺の力を探る機を窺っていたんだろ。それがたまたま今回だって話。

おかしいと思ったのは、一番最初。あいつのこちらを見る目。一瞬だけど、興味深そうに探るような目をしていた。あれは、俺がまだ河童の集落に馴染めなかった頃の、周りのやつらの目だ。異端なものを見る目。そして、冷たい目。

もしかして、と思った。だから聞いた、池上に。

「あの風切とかいう天狗はお前の知り合いか？」

答えはノー。知り合いから代わりに頼まれてきた、と言っただけらしい。

その時にはもう疑念は深まっていた。

だからさ、見せてやればいいのさ。

どうせここで見せなくても、いつか排斥されるのは目に見えてい  
るのだから。

俺の切り札を、龍神玉をな。

「龍神玉」

そう呟いた瞬間、ペンダントについた透明な玉が強烈な光を放つ。

「ぐっ」

背後で風切が呻くが無視して、ただひたすらに玉へと妖力を注ぐ。

半球体状の光がどんどん広がっていき、都市の半分を飲み込んだ  
ところで停止。

そして、少しずつ光が収まっていき。

そして、そこに、結界に捕われた無数の妖怪たちがいた。

「な……っ!!」

呆氣に取られている風切の横を抜け。  
「帰るぞ、天狗。あんま長くは持たないからな」  
一言声をかけ、そして飛んだ。

### 河野權調査報告

|     |   |
|-----|---|
| 危険度 | 高 |
| 敵愾心 | 中 |
| 有用度 | 高 |

これと言って、天狗を敵視しているわけでもないが、気に入らなければ、容赦無く牙を向く可能性が高い。  
その発明品の有用度は非常に高く、汎用性に富むものばかりだが、必須と言えるほどのものではない。

その性格や実力、観察眼などを鑑みるに、危険度は高いと思われる。

『河城菱伊を危険地帯に無断で連れて行った河野權を山より追放する』

そう天狗が伝えたのが今朝のこと。

ま、理由はどうあれ、山からは追い出されたいと思っていた俺はすでに荷物を纏めていた。ドラポケがあるので、かさばらなくて良い。心残りは多少あるが、問題は。

「本当に行くのですか？」

こいつだ。池上、いや、河城菱伊<sup>かわしろひし</sup>。たった一人、俺の出発を聞きつけてやってきたらしい。

「ああ、これ以上この山にはいられないからな」

「けれど、あんな！あんな嘘の」

「いいんだよ。それに、薄々気づいてはいたが、どうも俺はこの山には合わないらしい」

「どういう？」

「俺はどうも好奇心が強すぎるみたいだな。お前もそうだが、妖怪にとつて鉄は忌避すべきものだ。けれど、俺やお前は平気でそれを弄る。好奇心が勝ってしまう」

俺は別に理由もあるだろうけど。

「それが集落では異端な理由なんだろうな。お前は周りに友人が多いから良かったみたいだが」

だからこそ。

「俺はここを出て、ずっと旅してみたい。作りたいものもたくさんあるし、知りたいこともたくさんある。だから、俺はもうここにはいられないんだよ」

本当に厄介なことにだが、散々危険は嫌だと思っていたはずなのに。

どうも俺は、自身の好奇心に負けたらしい。それが俺自身のものなのか、それとも河童に生まれたが故のものなのかは分からないけどな。

もっとたくさんを知りたい。そして、もっとたくさんのもので作りたい。

その思いはずっと渦巻いていた。けれど、気づかないふりをしていた。危険は嫌だと、ずっとこの山で生きれば良いと、けれど、あ

の都市が出来て日に日に気持ちが大きくなっていくのを実感した。

だから。

「俺は行く。だから」

だから。

「じゃーな」

そう言って、俺は、後ろを振り向くことも無く、山を出て行った。

## こわ じゃーな（後書き）

まあ、一生山に籠られたら、話になりませんから、いい加減山を降りてもらいます。

ちなみに櫛の戦闘能力

紫など大妖怪の上のほう＞大妖怪＞櫛（道具あり）＞強めの妖怪＞普通の妖怪＞櫛（道具なし）＞普通の河童＞小妖怪＞妖精＞人間＞毛玉。

まあ、適当ですし、状況や個体によっては上下するかもしれませんが、作者のイメージ的なものです。

ろくわ でれてねーよ（前書き）

どうにも過去辺がまともな話にならない気がするので、一気に時間を飛ばしました。いきなり紅魔郷からです。

ただし、基本的に權は男なので弹幕ごっこしませんし、異変解決もしません。

ろくわ でれてねーよ

空から降りてくる巫女を見て、俺はまた一つ茶を啜る。

「って、何であんたがまたここで勝手にお茶を飲んでものよ」  
半眼でこちらを見る巫女に、用意していた籠を差し出す。

「これで文句ねーだろ……………霊夢」

「好きなだけゆっくりしていきなさい」

中に入った魚や果物を見て、満足そうに頷く俗物巫女、博麗霊夢。

もう昔過ぎてほとんど忘れたが、こいつと白黒魔法使いが主人公だつてのは覚えてる。

「それで？霧は晴れたつてことはもう異変は解決したのか？」

今日はどうも紅魔郷の日だったらしい。朝から紅い霧が幻想郷を包んでいた。俺は基本的に昼は寝ているので、夜に神社にやってきたのだが、霊夢はすでにいなかったの、こうしてお茶を飲みつつ、待っていたというわけだ。

「ええ、吸血鬼が昼間でも外に出たいからとかふざけた理由でやってたわ」

「そりゃまた……………しかし霊夢、お前とうとう吸血鬼まで降したか。いよいよ人間離れしてきたな」

からかい半分にそう言うと、お札が飛んで来たので、掴み取る。  
「今回はスペルカードルールでの勝負だったからよ。それに、いく

ら異変を解決した直後とは言っても、私の全力を込めたお札をあつさり掴んだあんたに言われたくないわよ、櫂」

「くく、まあ弱い弱い河童が全国を一人旅するには、どうしたって強くならざるを得ないんだよ」

実際、何度も死に掛けた。一番やばかったのは、やはりあのドSと出合った時だろうな。

「というか、何で河童が山を降りてきてるのよ」

「仕方無いだろ、俺は山を追い出されたんだから」

結局、力のある河童などこの山でも天狗の邪魔にしなければならないということだろうな。

まあ、妖怪の山の天狗の中にも面白いやつはいるんだけどな。

「追い出された、という割りにはよく山に行ってるじゃない」

「くく、何で天狗が勝手に決めたルールに従わないといけない?」

それにどうせ山を降りれば天狗は追って来ない。あいつら縄張り意識が高いからな。

「というか、神社に妖怪が来るんじゃないわよ。参拝客が怖がつて来なくなったらどうするのよ」

「じゃあ、お前、もう来なくてもいいのか?」

ぐつ、と言葉に詰まる霊夢。参拝客が来てるのなんて全くと言って良いほど見たこと無い上、来るたびに毎回食材持つて来てやつているからな。来なくなるとこの巫女本気で餓死するのではないだろうかと時々不安になる。

ゲームは所詮ゲーム、現実には何が起こるか分からない。それが俺が今まで経験した中で思ったこと。

実際に博麗の巫女がそんなことになったら、紫辺りがこっそり手を回すんだろうがな。

「どうにも餓死されそうで怖いんだよな、お前」

博麗の巫女には生きてもらわないと困るのは妖怪も同じだ、博麗大結界の中心である博麗の巫女に何かあれば、結界が揺らぎかねない。

外の世界と？がれば滅びるのは妖怪で、外の世界と？がれば困るのも妖怪だ。

「というか、いつまでいるのよ！？しかもさり気なく酒飲んでるんじゃないわよ！！」

紅かった月も元に戻ったのでちびりちびりと月見酒と洒落込んでいた俺だったが、夜遅いせいで眠そうな霊夢が怒鳴るので仕方なく神社を後にする。

「さて、次はどこに行こうかね」

霧雨のにもその内会いに行くし、ちよつくら白黒のところに行ってみるか。どうせ今回も首突っ込んでんだろ。

あのお嬢は霊夢とは違い夜行性だ。まだ起きてるだろう。

「何だ、懼か。こんな晩に誰かと思ったぜ」

家の戸を叩けば、やはりまだ起きていた白黒魔法使い、霧雨魔理沙。ゲームの主人公の一人。

「神社で酒飲んでたんだが、霊夢が寝るみたいだから出てきたんだよ。で、お前さんならまだ起きてるだろうと思って武勇伝でも聞きに来たわけだ。どうせ今回の異変も首突っ込んだんだろ？」

本当は霊夢が怒鳴るから出てきたただだが。まあ、人間だし、眠

いのも当然だろう。霊夢の場合、神社の巫女だけあって朝は早いし。

「別に首を突っ込んだわけじゃないぜ、偶々行った方向で異変が起きてただけだぜ」

「はいはい、そういう面倒な前置きはいいから。とりあえず、呑もうぜ？」

くい、と一升瓶を出すと、にかつと笑って扉を開ける。こいつのこういう気風の良さは結構気に入っている。

「相変わらず片付いてない家だな」

「私の分かりやすいように置いてるだけだぜ」

はいはい、と話を流すとどこからかお猪口を見つけてきてくいと差し出す。

「ほれ、一杯くらい注いでやろう」

こぼこぼと瓶を傾けて注いでやると、一気に飲み干し、美味そうに声を上げる。

「お前さんはホントに美味そうに飲むなあ、お嬢」

「美味しいなこれ、どこの酒なんだ？」

「これか？天狗のところからかつぱらってきた酒だ」

ぶふつ、と噴出す魔理沙。かかった飛沫をふき取る。

「おい、汚いぞ」

「わ、悪い……って、天狗のところからってそれは不味いんじゃないのか？」

「大丈夫だ、問題ない」

「それ死亡フラグ……」

まあ、本当は河童の集落に行った時にもらったやつだがな。あそこのは水の質がいいせい、酒も美味い。

「本当は河童のところのだ。ちゃんともらったやつだから大丈夫だ」

「な、なんだ……驚かせんなよ」

「で、霊夢は今回の異変は吸血鬼が起したとか言ってたが、どんなことがあったんだ？」

「ああ。その辺飛んでたらなんか変な妖怪が出て来てな」

「変な妖怪？」

「そうそう、人類は十進法を採用しました、みたいなやつだ」

端的過ぎて、意味が分からん。そう言うと、魔理沙は手を広げた。

「こんなやつだ」

「見たことねえな」

「まあ、対して強くも無かったし普通に倒して行っただぜ」

と、その時霊夢が言っていたことを思い出す。

「そついや、今回からとうとうスペルカードルールが行われたらしいな」

「霊夢から聞いたのか？まあ、そうだぜ。私もほれ、何枚か作ったぜ」

「ありや女しかやらんからなあ、俺はきつと一生やらないだろうな」

「面白いのに勿体無いぜ」

「悪いが俺は正々堂々なんてやってたらあつさりやられちまうんでな。卑怯でズルいことしかやってこなかったんだ。それを今更正々堂々なんてやってられん……まあいい、それより続きを話してくれよ」

俺の催促に応じて、魔理沙は続きを思い出すように語り出す。

「さっき言った妖怪を倒してそのまま進んだら霧の湖に出てな。それがやたら寒いから何かと思ったら、氷精がいたんだ」

「チルノか？」

「おう、たしかそんなやつだったぜ。なんだ？權、知ってるのか？」

「まあ、一応な。あいつ、面白いだろ」

「確かにあれは面白かったな。まあ、あいつもスペルカードルールで来たんで軽く蹴散らしたけどな」

「楽しげに笑う魔理沙に、霧雨のにはいい報告が出来そうだと、そう思った。」

「んで、湖抜けたら変な館があつてな」

「館……？あんなところに……ああ、幻想入りしたのか」

「以前は館なんて無かったし、だとすればここ何年かで幻想入りしたのだろう。」

「ああ、でそこで門番がいてだな」

「門番ねえ」

「なんていったか、外の世界の……すぐ隣の国」

「韓国？朝鮮？中国？」

「おお、それだ、中国。そんな感じの服着てたんだ」

「中華系の妖怪……？」

「感じからしてその館が吸血鬼の館。だとすればその門番が人間だとも思えん。」

「拳法とかしてるみたいだったけど、弾幕ごっこは対して強くなかったぜ」

「中国拳法……かどうかは知らんが。妖怪が拳法か」

「なんて名前だったかな……ゲームやったのなんて昔過ぎて覚えてないぞ……？でも、名前ネタで弄られてた覚えはあるな。」

「門を抜けて屋敷に入ったはずなんだが、いつの間にか地下にいてな、気づいたら図書館にいたんで、本の数冊借りようかと思ったら魔法使いが来たんだぜ」

「異変の解決の最中ですらその泥棒精神を忘れないお嬢には敬意すら覚えるな」

「だからそのお嬢つての止めろよ。それと泥棒じゃない、借りてる

ただだぜ」

昔、霧雨の坊主に世話になった時に、この魔理沙の世話を頼まれてからずっと俺は魔理沙をお嬢と呼ぶ。まあ、昔のことだし、詳しくは言わんが、家出した時を境に、魔理沙をお嬢と呼ばれるのを嫌がるようになった。この呼び方をされるとまだ家出した家との関係が断ち切れてないように思えてしまうらしいのだが、多分単純に一人こんな森の中で寂しいのを無意識的に隠しているのだろうと推察している。しかも、その寂しさを本人が自覚していないのだから、余計に気づけないだろう。

もうとっくにお互いは許してるのにな……………親子そろって意地張り合って頑固だわ。父親は父親で娘が心配で霖之助や俺に会うたびに魔理沙のことを聞くくせに、許してやったらどうだ？と聞くと、許さんと意地を張るし、魔理沙は魔理沙でまた別の意味で頑固だ。

「なあ、お嬢よ。いい加減に霧雨のと和解したらどうだ？」

「……………私はもう絶縁されたんだ、もうあの家とは関係ないんだぜ」  
他人の家のことなどあまり突っ込んだことを言う気にもならんが、どうにも不器用な親子で、一言言いたくなる。

まあ、魔理沙がもっと歳を取ったなら、自然と和解するのかもしれないがな。

「そうかい……………じゃあ、好きにしろ。とりあえず、たまには霖之助のそこには顔を出してやれよ。あれでお嬢を心配してるんだからな……………勿論、俺もな」

「權……………ツンデレってやつか？」

アホか、このお嬢は……………。

「でれてねーよ」



## ろくわ でれてねーよ（後書き）

というわけで、紅魔郷本編終了。  
櫛は何もしないよ。

一応櫛の年齢は数千歳くらいということにしておいてくださいね。  
紫よりちよっと年下くらいということ。

幻想郷でさえ、妖怪の山の天狗に山から追い出されてます。

まあ、本人が強いこともあるんですけど、規律守らないのも一つの理由としてありますね。

後、河童の中でも技術力が飛びぬけて高いので色々と問題が出てきます。まあ、その辺はいつか書くかと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6676u/>

---

へんなカッパのモノガタリ

2011年11月15日08時41分発行